所謂「F類カマド」型の集落(上総西部編)

谷　　旬

1．はじめに

私は，もう8年もの昔になってしまったが，カマドの形態分類を通じて効率化，機能的な変遷の可能性を書いたことがある(註1)。あれは，その頃誰もが少なからず感じていたカマドに対するイメージを代弁したに過ぎず，多くの問題を積み残したまま時を経てしまった。

その際，問題点として挙げた6つのうちにF類カマドがある。蛇足ながらF類とは長大な煙道をもつカマドで，基本的にはトンネル式に水平に掘り抜いたものをいう。前稿ではそれを袖部構造で1・2に細分したが，分類のための細分で殆んど意味をもたない。要はくり抜きであれ，開削であれトンネル式ならばそれで良い。ただ，新たにかなりの上昇角度をもつ長煙道が結構認められる。これは他の類型から派生した要素が含まれており，今のところ明解な位置付けはできないが，本文からはこれをF_3類とし，従来の細分をF_1類に統一したい。

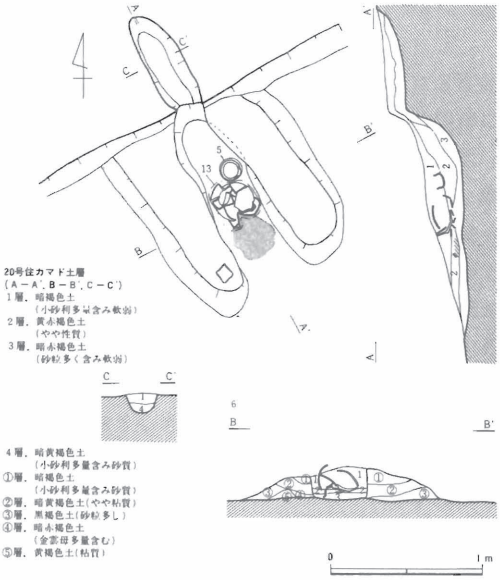

図1　永作遺跡20号住居跡カマド（S＝1/50）

2．福島郡山にて

私が前稿で残した検討課題は「東北におけるF類カマドの意味を良く理解するとともに，これを媒体とする他地方への影響を，……」といったような表現だったかと思う。昨年研修の一環として，福島県郡山市の発掘現場を訪れる機会を得ることができ，復命の意をこめて報告する。

通称中通りの平野部にある郡山市街地を眼下に望む東台地上に位置する永作遺跡は，昭和60年からの継続調査で，すでに一部については報告書も刊行されている(註2)。当時調査中の5世紀後半(南小泉式期)の集落は，一辺7～9m，深さ1mほどの竪穴住居跡が10軒ほどあったように記憶している。いずれも北壁にカマドがある。構造は，小砂利混じりの山砂で作った袖が平行に1m近くもあり，壁下から20cmほどの高さからくり抜いたように屋外へ伸びる煙道も1m以上のものが多い。まさにF類カマドである。

柳沼氏のお話では，当地では極くありふれた様相と言われたが，私が20年来描いてきたものといささか異なっていたので，正直，面食らってしまった。

3．上総西部にて

前置きが長くなってしまったが，私のおどろきもこんなところから察してほしい。

南関東ではこの類のカマドは散見されるに過ぎない。5世紀代にそれを求めるなら，後半の横浜市東原遺跡の一例あるのみである。しかし，極めて限られるとはいえ「F類カマド」型集落（以下簡略）が存在することも読者諸氏はすでに御存知のところであろう。上総西部である。以下奈良時代以前の類例も併せながら，「F」及び「F＋α」集落のいくつかを紹介したい。

市原市文作遺跡（1）は村田川支流神崎川に面した台地に展開する7世紀末から9世紀末にわたる複合大集落である（註3）。

116軒の当該期住居跡のうちにはかなりの建替えもあり102基のカマドを抽出し得た。7世紀末ではB_2・C類が殆んどで，23・30号住居跡のF類は煙道が短く，両者の変型であることがわかる。9世紀後半に至り，初めてこれが主流となる集落が出現する。このうち4例は同市萩ノ原遺跡（2）などでみられるように，甕を入子にした煙道を有する。主軸は北北東〜北西で一定しない。この遺跡では，9世紀末までにF類が衰微してしまう。市原地区には，他に萩ノ原・片又木C区（12）が9世紀後半の「F類」集落で，南大広（9）・下ケ谷台（10）に1軒ずつ存在する（註4）。

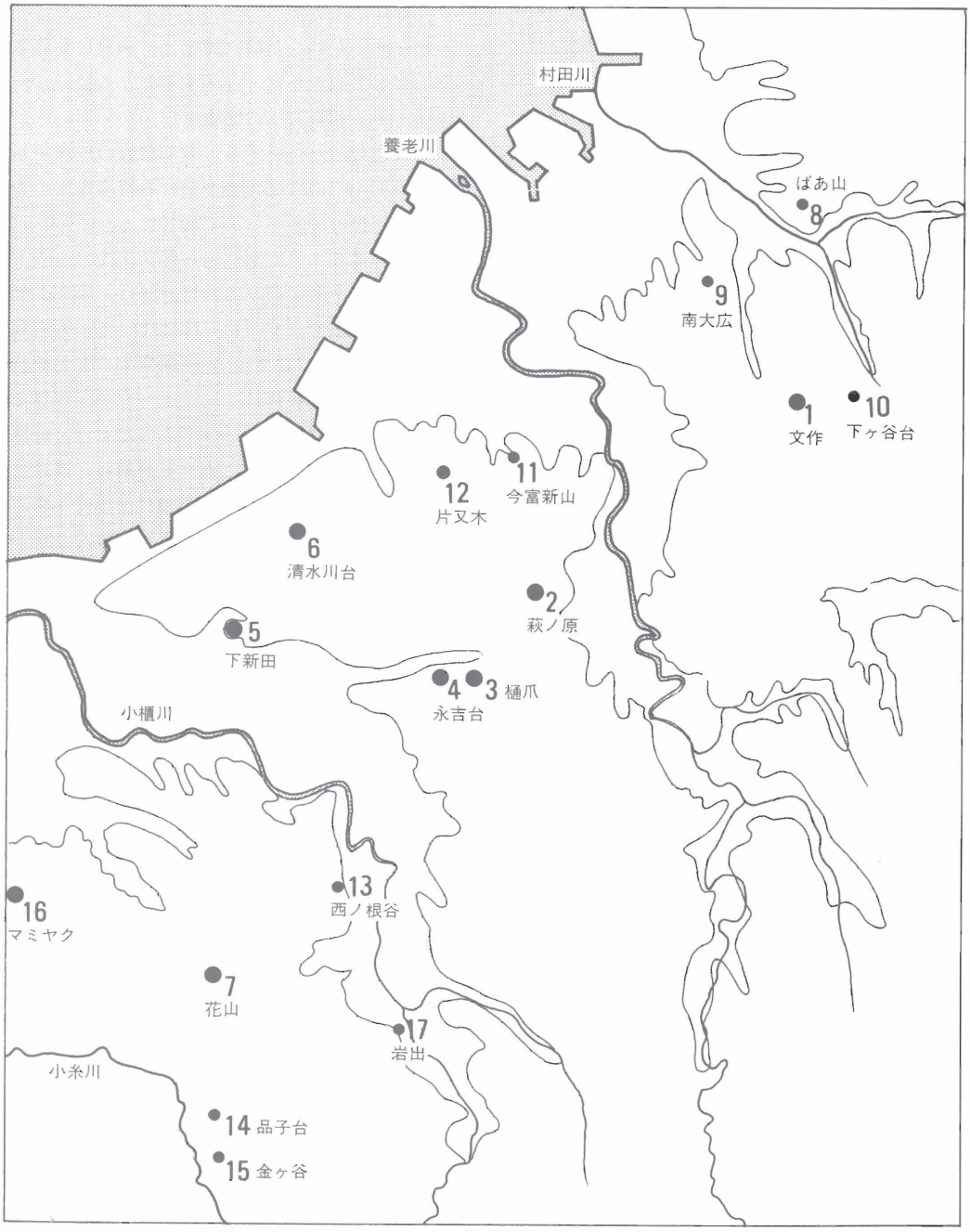

図2　上総西部「F類カマド」の分布（S＝1：200,000）

君津地区ではどうであろうか。木更津市花山遺跡（7）は矢那川の奥まった所にあり，古墳時代を主として住居跡は200軒を数える（註5）。時期区分が不明瞭なため，出土土器の様子からかってに判断したのが表1－7である。

とくに7世紀後半の住居跡のうち2例にB_2類変型があり，F類と把えた。同市マミヤク遺跡(16)にもまた同様，区別のつきがたいF_3類がある。他に小櫃川沿いの西ノ根谷（13）小糸川沿い品子台(14)に同期のF_1類が認められ，同類の典型と考えられる市原市ばあ山(8)，多古町林中ノ台遺跡(註6）とともに検討する必要があろう。8世紀代は18軒中13例がF_1類で，9世紀後半～末に至り「へっつい」が出現し，F類が激減する。この様相は，小糸川沿いの金ケ谷遺跡（15）小櫃川沿い岩出遺跡（17）でも顕著である（註7）。

袖ケ浦町下新田は小櫃川氾濫原の北岸に突出した台地にあり，300mほど隔てて西ノ窪・境遺跡がある（註8）。

8世紀後半から始まる集落は西ノ窪から展開し，すでにF類もみられるが，9世紀第1四半期（以下¼期）で完全な「F類」集落となって¾期の終焉まで続くことになる。方向は北向が多いが一定しない。北へ3kmほどの清水川台遺跡（6）は8世紀¾期から⁴⁄₄期前半で終る小集落である（註9）。

永吉台遺跡群（4）は小櫃川支流松川の左岸台地上に位置し，対岸には樋爪遺跡（3）がある（註10）。

集落の展開は谷一つ隔てた遠寺原地区に8世紀¾期から始まる。当初の2軒のうち44号住居跡にはEとC変型のF類カマドの2つが並立し，他はE類である。これが⁴⁄₄期に至り完全な「F類」集落へと突然変容し，少なくとも9世紀末まで続く。このあとを受けて西寺原地区では10世紀前半まで確実にこの傾向が残るが，¾期から現れたA類および「へっつい」に取って変られ⁴⁄₄期に消滅する。

現状では10世紀後半集落の調査例が殆んどないのではっきりしたことは言えないが，今回改めて新資料も加えてカマドを追い直した結果，前稿でも触れたようにカマドから「へっつい」に移行し，さらに「釜屋」に分棟して行く傾向は間違いないようである。

1

文　作	A	B2	C	D	E	F1	F3	他
7C末		9	6	1	1	1	1	
8C前		2	5	4	1			
8C後		3	3	2		1		
9C前		6	12	10		1		
9C後			3	2	1	10		
9C末	1		7	2	1	3		3

7

花　山	A	B2	C	D	E	F1	F3	他
7C後～		1	5			2	1	
8C前						6		
8C中～			3			5		2
8C後～						2		
9C後	1	1			1	2		2

5

西ノ窪	A	B2	C	D	E	F1	F3	他
8C 初			1	2				
8C 後		1			1	1	1	
9C 前						7		1
9C 後			1		1	5	1	1

4

遠寺原	A	B2	C	D	E	F1	F3	他
8C3/4					2	1		
8C4/4						8	1	
9C1/4					1	1		
～9C4/4					1	3		1
10C1/4						3		4

4

西寺原	A	B2	C	D	E	F1	F3	他
9C3/4～			1		2	6		
～10C1/4					1	7		
10C2/4	1		1	4		12	1	1
10C3/4	1			1	1	4		1
10C4/4	2		1	3	2			5

表1　各遺跡カマド分類表

遺跡 時期	1 文作	2 萩ノ原	12 片又木	16 マミヤク	7 花山	6 清水川台	5 西境ノ窪	4 遠寺原西寺原	3 樋爪	時期計
7 C 末	2/ 19			2/ 9	2/ 9					6/ 37
8 C 前	0/ 12				6/ 6	2/ 2	0/ 3			8/ 23
8 C 後	1/ 9			7/ 8	7/12	5/ 6	2/ 4	10/ 12		32/ 51
9 C 前	1/ 29						7/ 8	11/ 11		19/ 48
9 C 後	10/ 16 3/ 17	15/19	5/ 5		2/ 7		6/ 9	39/ 41	5/10	85/124
10 C 前								33/ 44		33/ 44
10 C 後								4/ 21		4/ 21
遺跡計	17/102	15/19	5/ 5	9/17	17/34	7/ 8	15/24	97/129	5/10	

表2　上総西部「F類カマド」型集落一覧（F類／検体数）

4．おわりに

お気附きであろうか。6～7世紀代のF類カマドは機能的変化から亜流として発生するのに対し，8世紀以降のそれは明らかに他の要因から，突然現れるようである。しかしまだ問題が残る。一はばあ山遺跡の明らかにトンネル状を呈する例であり(註11)，二は東京湾を隔てた神奈川県西部域に認められる「F類」集落の在り方である（註12)。また当時の人的交流とどのように関わりがあるのか，私はこれを機に，千葉全域～南関東，北関東～東北南部，さらに東北北部から北海道へとこの類のカマドを追ってみようと思う。

最後に読者諸氏にお願いがあります。私は常々カマドの熱効率を数値化できないものかと考えているが，これに大きく関わる煙道入口に関する情報を読み取れる図は皆無に等しい。是非「キ」状に断面を取ってほしい。また煙道下のわずかな裏込め土の有無に注意していただきたい。時間的にも差したる影響はないはずである。竪穴住居跡の床や壁，柱や規模などから得られる豊富な情報もさることながら，日常の生活手段として使用頻度の高いカマド，カマド自身が語りかける「言葉」に対し，我々が「通訳」の責を負っているのである。

註

1）谷　旬「古代東国のカマド」『研究紀要7』〈(財)千葉県文化財センター〉昭和57年（以下簡略化して表記）

2）（財）郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団調査員　柳沼賢治氏に御教授頂き，下記の資料の提供を受け図1に転載させていただきました。事業団『郡山東部7』〈市教委〉昭62

3）大村直『市原市文作遺跡』〈市文セ〉平元

4）寺門義範他『千葉県萩ノ原遺跡』〈日考研〉昭52。寺島博『片又木遺跡』〈市文セ〉昭59。坂井利明・市毛勲『市原市埋蔵文化財調査報告4』〈市教委〉昭43。浅利幸一『下ケ谷台遺跡』〈市文セ〉昭62。加藤正信君によれば調査中の今富新山遺跡（11）にも8世紀の例があるという。

5）平野雅之『花山遺跡』〈君文セ〉昭63

6）小久貫隆「ばあ山遺跡」『千原台ニュータウン1』〈県文セ〉昭61。三浦和信「林中ノ台遺跡の調査」『多古工業団地内遺跡群発掘調査報告書』〈県文セ〉昭61

7）小沢洋他『マミヤク遺跡』〈君文セ〉平元。大原正義「西ノ根谷遺跡」。光江章「金ノ谷遺跡」『富津火力線鉄塔建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書』〈君文セ〉昭61。光江章『品子台遺跡』〈君文セ〉昭61。池田大助他『君津市岩出遺跡・岩出城跡』〈県文セ〉昭60
8）井口崇他『西ノ窪遺跡』〈町教委〉昭60。小沢洋『境遺跡』〈君文セ〉昭60
9）佐久間豊『清水川台遺跡発掘調査報告書』〈君文セ〉昭58
10）豊巻幸正・笹生衛『永吉台遺跡群』〈君文セ〉昭60。小高春雄他『樋爪』〈調査団〉昭54
11）前述。高田博他『千原台ニュータウンⅢ』昭61に近似例あり。他に渡辺修一・福田依子両君によれば，草刈遺跡に5世紀後半例が認められるという。釜口幸市他「横浜市東原遺跡発掘調査報告」〈市埋文委〉昭和47
12）國平健三他『鳶尾遺跡』〈県教委〉昭50他

（追記）

脱稿後も，（註11）に掲げた気掛かりなカマドが脳裏を離れず，若干の行数をいただき簡単に紹介したい。

図3は草刈B区230A号址北東壁のカマドである。全長2.5mのうち煙道が1.5mを測り，わずかに上昇しながら壁外へ伸びる。掘り方全体に裏込め土を充塡する。中から出土した椀など古い様相を示す物もあるが，6世紀前半であろう。同E区には極めて遺存の良いカマドが数例ある。いずれも上昇角度25°～40°を示しF_3類にも加えることができる。遺物の様相から，より古い可能性があるという。非常に機能的な構造の東原遺跡の例を参考に，千葉における最古の例として検討を要すところであろう。

図4はばあ山009号跡北東壁に造られたものである。全長1.9m，トンネル式の煙道が1.1mである。ほぼ20°で上昇し，先端で立ち上がる。5層はおそらく火床であろう。西ノ根谷6号住居跡では壁の途中から煙道がくり抜かれるようであるが，ともに7世紀中頃のあり方として，8世紀のものの原点となり得るか否かを考えてみたい。

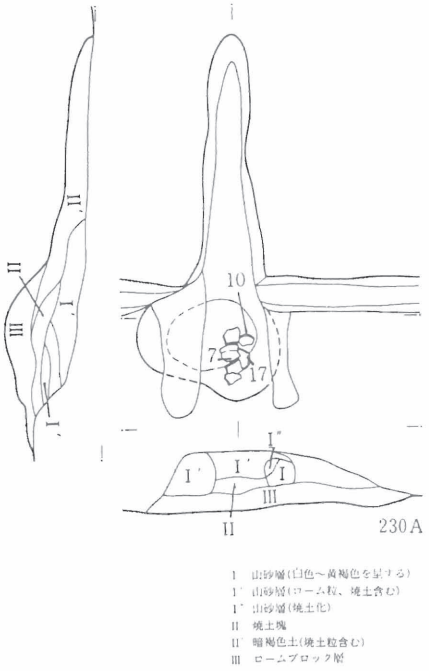

図3　草刈遺跡B区230A号跡カマド（S＝1/50）

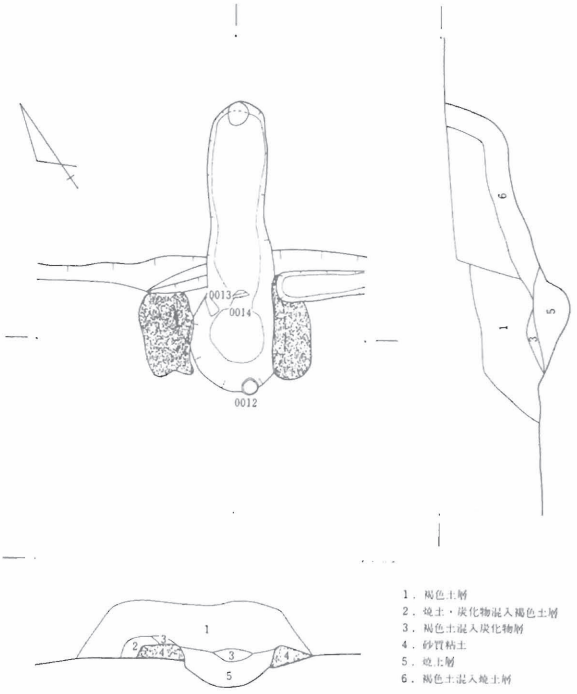

図4　ばあ山遺跡009号跡カマド（S＝1/50）